

令和八年度 熊本県立大学 文学部 日本語日本文学科
学校推薦型選抜 小論文 出題意図

日本の近代史に係る知識を前提とした文章を読み、筆者の主張を的確に読み取ることができるか。また、その文章作法の特色や議論の方法について分析することができるか。それらを論理的に記述することができるかなどを測る。

〔解答例〕

①

第一に、戦死者の多くが日本から遠く離れた戦場で亡くなったことが挙げられる。日本古来の慰霊の考え方として、郷土から遠く離れた地で非業の死を遂げた場合、その霊魂はたたりを起すと考えられており、それを鎮めるためには死んだ場所・時間を明らかにして葬る必要があるにもかかわらず、多くの場合それはかなわず、兵士や遺族にとっては痛烈な悲劇として記憶されることになる。

第二に、植民地満州への移民達が経験した過酷な引き揚げが挙げられる。敗戦当時満州には日本の人口の8・7%にあたる二〇〇万人もの日本人が存在したが、ソ連軍による侵攻以後、二四万五四〇〇人が命を落とすなど、極めて悲惨な状況下で、着の身着のまま日本に戻ることを余儀なくされた。

このような重い国民的記憶によって、戦争は、被害や労苦の側面から、すなわち「被害者」として語られることが多くなると考えられる。(三七三字)

②

筆者は、日本の「被害者」「加害者」いずれの側面を論ずる際にも、人数・人口やパーセンテージといった客観的なデータを根拠として説明することを徹底している。その一方で、折口信夫と藤井春洋、ちばてつやら漫画家・作家と長野県の人々など、極めて具体的な人物の例を用いて、戦死者と遺族、満州からの引揚げ者の労苦を述べることで、漠然とした数値としてではなく個別の人間の問題として戦争を捉えようとする工夫も行っている。こうしたことにより、戦争の「被害者」としての日本人という見方を一方的に批判することなく、戦死した者への哀悼も示した上で論を展開することができている。(二七四字)